

父親語と絵本について

柴田竹夫

1

正高信男（まさたか のぶお）¹⁾ は、「父親語」（男性による育児語）による、子どもに対する語りかけにおける働きには、性差があることを明らかにした。

二歳を過ぎた子どもたちに、オバケや怪獣の出ってくる怖い絵本を読み聞かせた時の、子どもの反応を、次の四つの読み方、すなわち（1）女子学生が母親語で語る、（2）女子学生が通常大人に対する様に語る、（3）男子学生が母親語で語る、（4）男子学生が通常大人に対するように語ることで比較すると、集中時間も興奮度も、男性が母親語で話す男子学生の、つまり父親語による話を子どもは、一番怖がることがわかった。

さらに母親語（女性による育児語）が、怖い話の語りにおいてはそれほどの影響を及ぼさないことも明らかとなる。つまり母親語の機能は、話の内容によって、女性による方が明らかに影響を与える場合と、男性の方が明らかに影響を与える場合とがあり、語り手の性による違いが見られる。

その違いとは、女性には「面白く楽しい話をより楽しくする」のが上手であるのに対して、男性は、「怖い筋書きをよりおどろおどろしくするのに長けている」ことである。成人男女の声の質の上での差異が、絵本の語りかけ（読み聞かせ）に大きな影響力を与えているわけで、これは男女間の性差による育児語の機能分化と言える。

育児語を発する時の二つの基本的特徴、すなわち（1）声の高さと、（2）抑揚のうち抑揚の大きさの点で、父親語の値が、女性による育児語をはるかに凌いでいる。そしてこの抑揚の大きさが、オバケや怪獣の話といった怖い話に合うものと推測される。

育児語は、声の高さが高いほど、話す内容の「かわいらしさ」が強調され、抑揚の値が大きいほど、「怖さ」の感情を引き起こすわけである。²⁾

2

一般に、父親語の働きは、絵本にとどまらない。例えば、熱いストーブに触ろうとする子ども

もに、危険なものに障ってはいけないことを分からせるには、父親が、冷静に、かつ抑揚のある父親語を使うのが有効であり、³⁾ 子どもは、父親の口調により、不安な気持ちを敏感に受け止める。⁴⁾ 父親語は、子どもを叱る時にも、危険を知らせる時にも有効なのである。

絵本の、子どもへの読み聞かせにおいて、育児語は効果的であり、特に怖い話の絵本は、父親語（男性による育児語）で読むと有効であることがわかったが、そうした絵本の代表作として、モーリス・センダック（Maurice Sendak, 1928-）の *Where The Wild Things Are*（『かいじゅうたちのいるところ』、1963年）がある。

3

次に『かいじゅうたちのいるところ』を吟味し、父親語と絵本との関わりを具体的に検討する。

その吟味の前に、人間と「自然」との関わり、そして人間の社会化について言及する。

正高は、こう指摘する。⁵⁾ 子どもの社会化に不可欠な畏怖の対象としての「自然、闇、野生」というものを、子どもに伝達することが、父親の重要な役割である。その父親の役割として、絵本における父親語の果たす働きがある。つまり「怖い話」には母親語よりも父親語（男性による育児語）が有効なのである。

「自然・闇・野生」が子どもの発達途中で出会う際の、子どもと自然の「媒介者」として父親が存在するわけである。⁶⁾

父親による絵本の語りは、子どもに自然を畏怖の対象として示すだけではない。子どもは母親の優しさに包まれて、安住の世界で育つだけでは子どもの社会化はならず、社会的存在として子どもの社会化を促すには、いつかは勇気を奮い安住の世界を出立する、つまり他人との関わりの中で生きる術を知る必要があり、それを促すのが、父親の担っている役割と言えよう。

その際話し聞かせると言う行為、語りを介して、子どもは社会的な存在となるわけである。⁷⁾ この時父親は、「自然の媒介者」であって、自然に立ち向かう力を子どもに与えるのである。

4

この絵本における「自然・闇・野生」とは主人公マックス（Max）にとって、現実世界のものであると同時に空想世界のそれでもあるが、現実世界と空想世界の間を行き来するマックスにとっては、その両方の世界が明らかに現実世界なのである。

更にこの絵本においては、自然とはマックスの心の中の木や海で表される「自然」であると同時に、マックス自身も「自然」なのである。そしてこの絵本に出てくる十匹の「かいじゅう」

とは、(1) 他者でもある他人であると同時に、(2) マックスの苦々しい自身の制御困難な心でもある。⁸⁾

そうした「自然」において、父親語による語り手の怖い語りは、子どもと「自然」の間の媒介の働きをする。

5

社会学者 G・ジンメルによれば、ヒトの「社会化」とは、「人々が日常的に繰り返している相互行為が、社会なるものを成り立たせている実体であり、それが社会を社会たらしめているという意味で、社会化と言い表すことができる」というものである。⁹⁾ つまり社会を成り立たせている日常生活のある状態が「社会化」なのである。これに対して、門脇厚司(かどわきあつし)は、『子どもの社会力』において、「社会力」という言葉を定義付けして「社会生活を営む人々のある状態を言うのではなく、社会というものを作り上げていく人間の側の能力とか意欲などでのことである」と言う。¹⁰⁾

つまり人間の社会力は、他者との相互行為によって培われるものであり、社会力の形成について五つのポイントを挙げながら、門脇は、こう言う。「人間は生存し続けるために社会的動物であらねばならず、社会的動物になるには社会力をみ身につけなければならず、社会力を身につけるには他者と相互行為をしなければならない。」¹¹⁾

更に、この社会力の形成過程を門脇は、次の三つのステップに分ける。(1) 社会的原基の形成、(2) 社会的要素の共有、(3) 社会的行為の日常化の三つである。最初のステップは、0歳から三歳くらいまでで、この時期「ヒトの子が自分以外の人間(他者)に対して関心と愛着と信頼を持つ。第二のステップは、四歳から二十五歳頃までで、「ことばとその意味であり、他の人々や自分が社会で占める社会的地位とそれに伴う役割行動であり、生活世界への意味付けであり、価値や社会規範や美意識などである。」第三のステップは、二十代後半から六十歳頃までである。¹²⁾

この三つのステップにおいて、第一のステップは、最重要で、それがうまく育つ環境を作ることが養育者に求められている。このステップにおける二歳半～三歳の子どもは、すでに他者が様々な精神状態を持つことを知っており、他人の心を「推測」する能力の素を先天的に持っている。¹³⁾

従って、第一のステップと、第二のステップの初期において、こどもは、絵本の読み聞かせ(語りかけ)を通じて、他人の心を推測しながら養育者(父親、母親等)という他人との関わりの中で、他人に対する「愛着」、「信頼」、「関心」を獲得すると考えられる。

特に「父親語」による絵本読みは、社会的存在としての子どもの社会化を促し、社会力を付けるのに極めて有効な手段と考えられる。

次に『かいじゅうたちのいるところ』の場面ごとの分析に入る。¹⁴⁾ 表紙と中表紙と19の場面からこの絵本は構成されている。

(1) 表紙：

一匹の角をはやしたかいじゅうが、木々の間に座って肘を突いて眠る。一艘の小船が近くにとまる。

(2) 中表紙：

左半分に二匹のかいじゅうが、両手を掲げ、まいったという表情をして、狼のぬいぐるみを着たマックスに追いかけている。彼らはオスとメスのつがいのように見える。メスのほうは、赤毛に優しい目つきをしているが、オスは、怖い目をしている。他方マックスは、王冠を冠り、この二匹を脅かしているように見える。この先マックスが、かいじゅうたちの王様になることを暗示する。右半分に追いかけるマックスとタイトル。

(3) 第1の場面：

見開きのページで、左半分は文のみ、右半分に比較的小さくマックスのいたずらの場面。左足は壁に付き、右足は2冊の本を踏みつける。壁にハンマーを振るい釘を打ち付け、ひもとをうしてシーツをテント（後に王様のテントの先触れ）代わりにする。右ページ左端の紐に吊るされた動物のぬいぐるみ（後に出て来る山羊に似たかいじゅうの先触れのように見える）は、二度姿を見せる。ここのマックスの傍若無人ないたずらの場面は、後に「かいじゅうたちのいるところ」に赴くマックスの組み立てた、ファンタジーの冒険の旅立ちを暗示する。

(4) 第2の場面：

見開きのページ。左半分は、文のみ。右半分は、比較的小さな枠内にマックスのいたずらの場面。いたずら者マックスは、左手に大きなフォーク（後に王様のマックスが左手に持つ王のしるしの王しゃくを暗示）を、振り上げて二階の階段から犬を追いかけて、壁にはマックスの描いたかいじゅうの顔の絵（マックスの想像力の表れ）があり、それは後のかいじゅうの姿を暗示している。

(5) 第3の場面：

見開きのページ。左半分は文のみ。右半分はこれまでの二つより比較的大きな絵となる（マックスの想像の世界の広がり暗示）。母親を「このかいじゅうめ」と言わせるほど怒らせてしまったマックスは、負けずに「お前を食べちゃうぞ」と母親に言い返し、自分の部屋に閉じ込められてしまう。憤然とするマックス。マックスの想像力は働き、心の中でかいじゅうの世界は大きく膨らみ始めている。

(6) 第4の場面：

見開きのページ。左半分は文のみ。右半分は直前の絵の大きさより大きくなっている。マックスの部屋の中に木々が生え、彼は想像力を膨らませる。

(7) 第5の場面：

見開きページ。左半分は文のみ。右半分は直前の絵より更に大きくなる。更に木々も生え続ける。テーブルは木の茂みに変化し、ドアは消え、ベッドは草木に変容し、カーペットは草地に変わる。枠からはみ出る葉は、想像力の広がりを暗示する。月は三日月。満足気にはほえむマックス。

(8) 第6の場面：

あたり一面木が生え、森となり、野原が広がる。マックスは、小躍りを始める。月は三日月。絵は右半分一面。

(9) 第7の場面：

左半分には文があるが、右半分の絵が左半分に少し進出してきており、マックスの想像力の広がりが、更に進むことを暗示する。マックスの乗る小さな不安げな船（彼のベッドを暗示する）が波により打ち寄せられ、彼はそれに乗り、夜も昼も航海する。

(10) 第8の場面：

マックスは、一年と一日航海すると（ヒトの心の深奥を暗示）、「かいじゅうたちのいるところ」の陸地によろやく着く。一匹のかいじゅうが彼を迎える。この旅は。マックスの心の内奥への旅でもあり右半分の絵は、ページいっぱいの広がりを見せ、更に左半分のかなりに進出している。

(11) 第9の場面：

見開きページ。上から2/3が絵の部分。下の1/3が文の部分。マックスが陸地に船をつけようとする、背に山羊かいじゅう（二度姿を見せ、そして消える。つまり他のかいじゅうに食われてしまったことを暗示、マックスの部屋でハンガーにぶら下げられたぬいぐるみを思い出せばよい。背中に山羊かいじゅうをのせた怖いかいじゅうや中表紙の二匹のかいじゅうが威嚇しながら、すごい声で吼えて、歯をがちがち鳴らし、すごい目玉をぎょろぎょろさせて、すごい爪をむき出す。こわい場面であるがマックスは怖がっていない。それはマックス自身が怖いかいじゅうであるから。

(12) 第10の場面：

見開きページ。上から2/3が絵の部分。下の1/3が文の部分。時は夜。月は三日月。マックスは、腹を立てて、「しずかにしろ」とかいじゅうたちをどなりつけ、「かいじゅうならしの魔法」を使う。子どもの欲しがりそうな魔法だ。5匹のかいじゅうたち（内1匹は先ほどの山羊かいじゅう、内2匹は先ほどのオス、メスのつがい）は、驚きの眼でマックスを見る。この魔法はどんなものかということ、マックスが目を見開いて、かいじゅうたちの黄色

い目をじっとにらむと、かいじゅうたちは恐れ入り、こんなかいじゅう見たことないと驚く（マックスの内なるかいじゅうの大きさを暗示）。

(13) 第11の場面：

見開きページ。上から2/3が絵の部分。下の1/3は文の部分。かいじゅうたちは、マックスを「王様」〔子どものなりたがるもの〕にする。マックスは左手に王しゃくを掲げ、王冠を冠る。5匹のかいじゅうたちは皆恐ろしく、気味の悪い異形のものである。マックスはかいじゅうたちに大声を張り上げて、「かいじゅう踊り」を踊ることを命じる。彼らは皆服従の姿勢を示す。月は三日月。これらかいじゅうの中に1匹人間の足先に似たものを持つものがある。これをマックスの父親とみなすこともできる。すでにこれは表紙に出ている。¹⁵⁾

(14) 第12の場面：

第12～14の場面は、クライマックスの場面。マックスの想像世界が最大に広がっている。この三つとも見開きページが一面絵の部分で、文の部分がない。月は満月。マックスは、4匹のかいじゅうと一緒にかいじゅう踊りを大声を上げ、地面を踏んで踊る。

(15) 第13の場面：

見開きページが一面絵の部分で文はない。マックスは、他の4匹のかいじゅうと共に満足気に木の枝にぶら下がり、他の4匹のかいじゅうと同じく足を動かす。時は朝の様子。一晩中かいじゅう踊りを踊っていたようだ。人間の心の奥底にあるもの苦しい衝動か。

(16) 第14の場面：

見開きページで、絵の部分のみ。1匹のかいじゅう（足が人間の様なかいじゅう）の背に乗り、右手に王しゃくを高く掲げ、他の4匹を従えて、堂々と行進するマックス。

(17) 第15の場面：

見開きページで、右2/3が得の部分、左1/3が文の部分。時は夕刻。王様マックスは、テントの中の椅子に腰掛け、左腕で膝の上に肘を付き。浮かない顔。かたわらに人間の足様のかいじゅうが眠り、他のもう2匹も側で眠る。夕食抜きでかいじゅうたちを眠らせたのは、マックス自身だが（マックス自らが、自らの心の闇を抑えることができたことを暗示）、さびしくなって母親（自分を愛してくれる優しい人）のもとに帰りたくなる。母親に夕飯抜きを悪戯ゆえに言い渡されたマックスは、かいじゅうたちに夕飯抜きを言い渡して母親に対する仕返しをした反抗的なマックスである。その時遠くのむこうの世界から、おいしそうなおいが漂ってきて（現実の世界をふと思い出したか）、マックスは、かいじゅうの王様を辞める決意をする。

第12、13、と14の場面のピーク（一つは満たされた思いのピークでもあろう）を過ぎて、第15の場面、彼の想像の世界は縮み始める。

(18) 第16の場面：

見開きページ。上2/3は絵の部分、下1/3は文の部分。マックスは、満足気に船に乗

り、「かいじゅうたちのいるところ」を手を振って別れを告げる。かいじゅうたちは、必死にマックスに「おねがい、いかないで」と泣いて、引き留めようとする。食べたいじゃないほどと言われるほどかいじゅうに好かれるマックスは、母親を食べるぞと脅かした」が、今度はかいじゅうたちにそう言われる立場になる。「たべてやるからいかないで」と留まるように懇願されるマックスだが、「そんなのいやだ」ときっぱりと断る。

この時の5匹のかいじゅうの顔つき、手つき、目つきの恐ろしさは、きっと子どもたちを怯えさせるほどのものに見える。かいじゅうたちは、すごい声で「うおー」と吼えて、すごい歯をかちかち鳴らし、すごい目玉をぎょろぎょろさせて、すごい爪をむき出す。恐ろしいかいじゅうの本性がむき出しになる。いつもはやさしそだった赤毛のかいじゅうさえもここでは怖い顔つき。

(19) 第17の場面：

見開きページ。右半分と左半分の右1/3が絵の部分、残り2/3が文の部分。なにやら物思いにふけるマックス。時は夜。月は満月。波立っている。マックスは「やさしいだれかさん」つまり母親のもとに向かって1年と1日かけてもと来た方に逆戻りする。

(20) 第18の場面：

見開きページ。左半分文字のみ。右半分絵の部分。マックスは、自分の部屋に戻り、おおかみのぬいぐるみの頭の部分を脱ぐ。窓の外は満月（マックスの満たされた重い現れ）。家を出発した時は三日月。元に戻っている部屋のテーブルの上には夕飯が容易されている（勿論母親による）。マックスは右手を頭にやって、自分の今までの体験（冒険）を振り返っている顔つき。

(21) 第19の場面：

見開き、左半ページ。文字のみ。夕飯は「まだほかほかとあたたかかった」の1行で話は終わる。

マックスの想像の世界は、第12；13；14の場面を境にして、それらにむかって次第に膨れ上がり、その後次第に縮んでいく。そのクライマックスでのかいじゅうたちの顔つき、体つきの怖さが子どもたちの目を釘付けにする。

マックスの想像の膨らみによって現実の世界からファンタジー（空想）の世界に向かって小船に乗って行ったのだが、恐ろしいかいじゅうたちの手を逃れ、「食べられずに」無事家に戻り、母親の愛情のこもった（悪戯と雑言にも関わらず）夕飯にありつける。絵本『かいじゅうたちのいるところ』は、いわゆる「生きて帰りし物語」なのである。

マックスは自分の部屋の現実の世界からかいじゅうたちのいるファンタジーの世界へ入り、

彼らの王様になりながらも母親のもとにふと帰りたくなり、再び自分の部屋の現実の世界へと無事帰還したわけだが、彼はこの際二つの怖さを乗り越えている。一つは、かいじゅうたちの異形のそれあり、二つは、食べられずに親元に生還できるかどうかのそれである。

マックスは、かいじゅうたちの王様になり、畏怖の対象としての「自然・闇・野生」であるかいじゅうたちをコントロールする術を知る。更に、大人の道を歩き始めたマックスである。悪戯もし、王様になり、魔法を操り、親の指図も受けたくない。しかし親の愛を欲しがり、これを確かめ手にしたマックスである。

『かいじゅうたちのいるところ』のファンタジーの世界は、実は、単にファンタジーではなく、マックスにとっても、絵本の語りを聞く子供にとっても、自分の部屋から出、そして戻るファンタジーの形で表された現実の世界でもある。子どもは、ファンタジーと現実の両方を生きている。

センダックは、ファンタジーについてこう考える。¹⁶⁾

空想は子どもの生活のあらゆるところに浸透しています。人間は生きている限り一子どもだけでなく、大人の場合も一常に空想を網み続けているものだとは思っているのです。しかし私たちは、それが幼い子どもの未熟な精神にしかふさわしくない馬鹿な遊びでもあるかのように、空想を子どものものと決めつけてしまいたがります。確かに子どもたちは、私たちがもう覚えていないようなやり方で、空想と現実との両方に生きています。彼らは非論理的なものの論理についてのクールな感覚を持っていて、ひとつの領域からもう一方へとごく簡単に移動します。空想は子どものために書くすべてのものの核であるだけでなく、あらゆる本の、あらゆる創造行為の、そして多分生きることそのものの核でもあると思うのです。しかし、こうした空想には目に見える形が与えられなくてはならないので、それを囲むように家を建てることになります。その家が物語と呼ばれるものであり、その家にペンキを塗る作業が本作りです。しかし、本質的にはそれは夢、言い換えれば空想なのです。

更にコールデコット賞受賞時のスピーチにおいて、ファンタジーに救いを求める子どもについて、次の様にも語る。¹⁷⁾

子どもたちが、自分の直面する恐ろしい厳然たる事実と戦うためにはやっつける標的となるものが必要で、それを呪文をとなえて呼び出さなくてはなりません。子どもたちは恐れ、怒り、憎しみ、欲求不満—つまり、彼らの生活の日常的な部分を占めていて、御しがたく、危険な力としか思えないすべての感情に無防備であるという事実と戦わなくてはならないのです。このような力に打ち勝つために、子どもたちは空想に救いを求めるのです。空想の世界では、感情が作り出す困った状況も、彼らの満足のいくように解決されます。わたしの本

父親語と絵本について

の主人公マックスは、空想をくぐりぬけ、母親に対する怒りを発散させ、眠くて腹ペコ、しかもスカッとした気持ちで現実世界に戻ってくるのです。

ファンタジーの世界においてマックスは、二重の「自然」(=自身そしてかいじゅうとかいじゅうたちのいるところ)を経験し、「自然の両義性」を知った、つまり父親語による怖い話の語りは、子どもに自然の恐ろしさと同時に、自然との付き合い方を知ることにより大人になることを知らしめる。他方子どもは、親元という安全な場所にもみ生きるのではなく、親元を離れて危険な場所に生きることを経験し、「社会力」を持った大人になって生きていかねばならないことを知る。それはまた、自然に立ち向かい、自然を開拓し、人間関係を拓けていく、つまり「自己の領域の拡張」である。¹⁸⁾

この時親は、子どもが自主的に不確実なことに挑戦しようとすることを見守り、安全な場所を与えることにより、子どもは安心して未知の新しい世界へと立ち向かうことができるのである。マックスの様に。

8

絵本の読み聞かせを通して、父親が育児語(父親語)を使って「自然」との媒介者として働く中で、子どもとの継続的な相互作用をすることが非常に大切なことである。¹⁹⁾ 養育者として子どもに応答することが、父親としての責任を果たすことでもあり、いわば現代の父親の復権にも繋がるだろう。その時子育て(育児)が子どもの外の世界への探求への導きとなり、他方大人にとっては、ホイジンガの『ホモルーデンス』の言う「遊び」ともなれば、子どもの世界を拡大しようとする父親にとっても、養護的な役割を担う母親にとっても、子どもと共に、新しい世界が開けてくるであろう。²⁰⁾

注

- 1) 正高信男『ヒトはなぜ子育てに悩むのか』(講談社, 2001年), 65~78頁。Cf. 「育児語」全般については、拙稿『育児語について』(神戸親和女子大学児童教育学研究第27号所収)を参照されたい。
- 2) 正高信男『父親力』(中央公論新社, 2002年), 80頁。
- 3) 正高信男『0歳児がことばを獲得するとき』(中央公論新社, 1996年), 130頁。
- 4) 同上書, 82; 129頁。
- 5) 『ヒトはなぜ子育てに悩むのか』, 72頁。
- 6) 『父親力』, 86頁。
- 7) 同上書, 88頁。
- 8) 谷本誠剛他編『絵本をひらく 現代絵本の研究』(人文書院, 2006年), 21頁。
- 9) 門脇厚司『子どもの社会力』(岩波書店, 1999年), 62頁。

- 10) 同上書, 62頁。
- 11) 同上書, 93~94頁。
- 12) 同上書, 101頁。
- 13) 同上書, 92頁。
- 14) テキストは, 神宮輝夫訳『かいじゅうたちのいるところ』(富山房, 2000年)。佐々木宏子他編著『幼児の心理発達と絵本』(黎明書房, 昭和59年), 168~178頁には各場面の解説と二つのこわさへの言及がある。
- 15) Cf.『絵本をひらく』, 20頁。
- 16) モーリス・センダック著 脇明子他訳『センダックの絵本論』(岩波書店, 1990年), 184頁。
- 17) ジョナサン・コット著 鈴木昌訳『子どもの本の八人』(晶文社, 1988年), 82頁。
- 18) 『父親力』, 147頁
- 19) 『子どもの社会力』, 164頁。
- 20) 無藤隆他編『発達心理学入門 I 乳児・幼児・児童』(東京大学出版会, 2000年), 17頁。

絵本の読み聞かせの効用について, 本稿で扱った父親語(男性の育児語)による「自然」の両義性を子どもに教えるという効用の他に, 子どもに与える四つの効用が考えられる。一つは, 絵本を通して養育者は, 子どもと情緒的交流をなすことができること, つまり愛着の問題である。そして二つは, 養育者の感覚, 感情, 行為を通して子どもの外の世界とつながること, 三つは, 絵本は, 子どもがことばを覚える大切な道具であること(『0歳児がことばを獲得するとき』, 102頁)。四つは, 「物語」を紡ぐ礎となり, ヒトの記憶が形成されることに繋がること。

この四つ目の, 子どもの記憶形成と物語の関係は, およそ生後3年間のエピソードが心から消えてしまう, いわゆる「幼児性健忘」(『父親力』, 64頁)の問題と繋がると考えられる。「幼児性健忘」は, その原因がよく分かっていないが, 一つの仮説として, アメリカのネルソンと言う心理言語学者は, 「幼児には個人的な体験をもとに恒常的な記憶を形成する能力が欠けている」と主張し, 幼児が「記憶」を持つためには, まず「物語」を作る技能を習得しなければならないと言う(『ヒトはなぜ子育てに悩むのか』, 174頁)。